

F 15 岩手県高校家庭クラブ、ホームプロジェクトの変遷 第2報 食物領域
岩手大教育 清水 彦 郡山女大家政 工藤澄子
県立盛岡短大 ○大森 博

目的 岩手県高校家庭科教育戦後史研究の第4年次目は「学校家庭クラブ並びにH・P活動の変遷を主題に取組んだ。本研究は岩手県高校家庭クラブ連盟における研究発表の研究を衣、食、家庭経営・保育家族の3領域毎に分け、歴史的考察を行うこととを目的とした。この報では食物領域について考究した。

方法 県高校家庭クラブ連盟機関誌「高校家庭クラブ」昭和28年創刊号より昭和54年までの26年間に掲載された内容から食物領域を12項目に分け、項目毎研究内容を分析し、時代の推移による問題の所在と解決法について家庭科教育の視点より考察する。

結果 食物領域と病態栄養から郷土食までの12項目に区分し、7/編の研究内容について考察した。病態栄養の研究は昭和30年代までは結核、昭和40年代になると成人病特に高血圧問題が中心課題となり、昭和50年代に入ると高校生自身の食血が全校問題として取り上げられ時代の推移と研究課題が一致している。食生活改善については昭和20年代は迷信も多く地域の生活全般の改善に発展している。次第に栄養の充実、バランスのとれた食事に視点が向けられている。生活費に占める食費の割合は昭和26年51.7%、昭和40年36.3%と高かった。この時代は食物と経済を研究課題として取扱う件数が多かったが、昭和45年以降経済問題は出現していない。インスタント食品については昭和38年から研究対象とされているが当初はこれらを利用する方向で研究が進められ、粉末ジュース、ラーメンが王座を占めている。H・P研究の場合、生徒個人の問題を扱った研究より家族全体又は家族構成を扱ったものが多く、人間関係の向上や家族愛に根ざした思いやりが基本になっている。